

◎消えゆく森の再生学—アジア・アフリカの現地から 大塚啓二郎著 新書版  
224 pp. 講談社 東京 1999. 11 刊 定価 660 円 (税別)

世界的な森林破壊が急速に進行し、途上国の農民の生活と調和させながら森林破壊をくい止め森林環境を再生することが求められている昨今、本書はアグロフォレストリーや林業を振興しながら環境の改善を図る方法を検討する上で参考になる。著者は経済発展論が専門の経済学者であり林学の専門家ではないが、世界7か国の森林を「密着取材型の現地調査」を行い、森林問題の解決策を提言している。章立ては、第1章 消えゆく森、第2章 ガーナの森、第3章 スマトラの森、第4章 ウガンダの林、第5章 マラウイの林、第6章 ベトナム北部の山々、第7章 群馬の森、第8章 ネパールの林と森、第9章 これからの森、となっている。第1章に本書を書くに至った動機について「森林問題とは実は食糧問題であり貧困問題である。だからこそ解決が難しい。しかし、環境問題に興味を持っている人を含めて、このことを理解している人はほとんどいないのではないだろうか。このことを少しでも多くの方々に理解してもらいたいと思った」と述べている。第2章から第8章に各国の森林破壊の現状とそこに暮らす人々の生活や土地制度等を述べている。「木を見て森を見ず」とはよく言われることだが、著者は、「これまでの森林研究では、木ばかり見て土地制度や人々の行動様式について十分な関心が払われてこなかった。これからは森を守るにせよ育てるにせよ、そこで生活する人々が何を考えているのか、どうしたら彼らが喜んで森を大切にすることを考えなければならない」と述べ、「木を見て人を見ず」と戒めている。第9章は結論と森林問題解決のための提言であり、「アグロフォレストリーは一定面積当たりの収入の面でも雇用吸収力の面でも、焼き畑に比較して2倍から4倍くらい優れている」と述べ、「アグロフォレストリーは土地利用の効率化を通じて貧困を軽減し、環境を保全する理想的な土地利用システムである」と評価している。また、従来の植林プロジェクトに取り入れられてきた社会林業は再検討すべきであるとし、社会林業は樹木の保護を共同で行うには有効であるが、樹木の世話、すなわち、下刈り、つる切り、間伐、枝打ち等の育林作業をするには不向きであり、「現在行われている社会林業プロジェクトは、人々が木の世話をする動機を無視している点で、残念ながら失格である」と述べ、木の世話には個人にインセンティブを与えることが必要であり、「木の保護は全員で、世話は個人で」という原則に即した新しいプロジェクト方式の普及が必要であると提言している。(小野寺弘道)